

霞

—2011年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成23年10月1日発行(通巻第17号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(2~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(17) 古写真 「土浦城櫓門」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(17)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展示会と催し物等】
- 高峰和尚像(中世)・・・2
- 俳句に託された思い(近世)・・・3
- 土浦城櫓門の太鼓(近世)・・・4
- ツェッペリン伯号飛来の新聞記事(近代)・・・5
- 『土浦郷土読本』(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「体験講座参加者の声」・・・8
- コラム(17)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

明治時代の土浦城櫓門。櫓門は2階部分に太鼓がおかれ、城下に時刻を知らせたことから太鼓櫓ともよばれた。背後に見えるのは新治郡役所の建物。大正時代に近代的な西洋建築に建て替えられる以前の姿。【情報ライブラリー検索キーワード「櫓門」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話しします。

10月9日(日)・12月18日(日) 午後2時~(1時間30分程度) 視聴覚ホールにて

11月20日(日)は史跡めぐりです。常陸太田方面の古墳を巡ります。※詳細は博物館までお問い合わせください。

★★第33回特別展 はたおり教室20周年記念事業

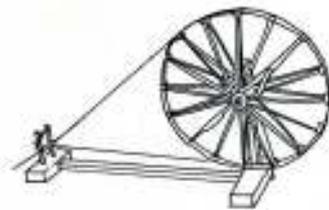
「暮らしをささえる女性たち—紡ぐ・織る・仕立てる・繕う—」★★

会期 2012年1月7日(土)~2月19日(日) ※1月9日を除く毎週月曜日と1月10日は休館

糸を紡いで布に織る、はたおり教室の活動は昨年20年目を迎えました。

はたおり教室が継承する技術をもとに、女性たちの暮らしぶりをご紹介しますことで、女性の家事や布に対する思いを考える展示会です。

関連事業として記念講演会・実演会・はたおり体験・綿の種取り体験・史跡めぐり・展示解説会等を予定しております。詳細はホームページ等でご案内していきます。



★★特別公開「土屋家の刀剣」国宝・重要文化財の公開★★

会期 2011年10月1日(土)~11月13日(日)

土屋家刀剣の中から国宝・重要文化財を公開します。また、今年度購入した土屋家刀剣「影法師」を初公開いたします。

★休館日のお知らせ★ 月曜日(10月10日を除く)、11月4日(金)・24日(木)、12月26日~1月6日

★祝日開館します★ 10月10日(月)、11月3日(木)・23日(水)、12月23日(金)

★無料開館のお知らせ★ 11月3日(木)文化の日・13日(日)県民の日

★秋季展示は10月1日(土)~12月25日(日)までです。★

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

高峰和尚像（重要文化財）

— 髪をのばしている中国の禅僧 —

高峰和尚（1238～1295）は蘇州呉江の人で、俗姓は徐、字を高峰、諱を原妙と称した中国の南宋時代から元時代にかけての著名な禅僧です。高峰が活躍したのは、南宋が元に滅ぼされる時期と重なり、元軍の進行とともに多くの僧が四散して、中には日本に渡る者もいました。このような中で高峰は至元16（1279）年、42歳の時に死地として選んだ西天目山に入り、ひたすら坐禅に取り組んでいたようです。

高峰が坐禅を行っていた場所は、獅子窟と呼ばれる断崖絶壁の地で、正面には仏面石が見られます。この地で戒律を重視し、厳格な実践修行を行っていた高峰は、死地に入って17年目の元貞元（1295）年、58歳で示寂しています。高峰の高名を聞いて参禅した弟子は100名程でしたが、中でも傑出したのが中峰明本（「霞」16号で紹介）でした。高峰については、『高峰原妙禅師語録』『高峰禅要』等の書があり、中でも『高峰禅要』は朝鮮国で最も読まれ、日本に渡って後、近世の禅宗史に大きな影響を与えています。

貞和2（1346）年、復庵（「霞」2号で紹介）の求めにより、西天目山の珂月・善榮の2師から、中峰と高峰の頂相が法雲寺（土浦市高岡）に贈られました。曲泉に坐して竹篋を持つ高峰は、顎にうっすらと髭を生やし、横に伸びた端正な口髭も見られます。また、頭髪を豊かに伸ばし、今でいうアフロヘアのような髪型をしています。法雲寺では髪を生やした高峰の頂相を「有髪之御影」と呼んでおり、中峰・復庵の頂相と合わせて「三御影」と称しています。

肖像画の上部には、「庚寅」（1290）年に絶岸可湘が賛を認めています。また、「甲午」（1294）年に王剛中による賛が付け加えられています。

（絶岸賛）「妙峰頂幾何高、機輪圓活丹腹難描、獅子窟中無異獸、満天聲價浙江潮、定禪老絵/高峰和尚肖像/請讚云、絶岸可湘/庚寅結制前書/（朱印）（朱印）」

（剛中賛）「好俊峭、妙高峰上高峯妙、阿誰與你拖屍来、卷却龍鬚擘獅口、頂門着眼鼻撩天、倒卓須弥兔蜎走、閻浮神通千萬般、奈何殺活落汝手、咄、真箇描成畫得就、猛撈西峯打筋斗/甲午王剛中題（朱印）（朱印）」

（中澤達也）



仏面石（西天目山）



高峰和尚像（法雲寺所蔵）

12/3（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 中峰和尚所用の禪版（市指定文化財）
- 法雲寺文書「珂月禅榮二師覆書状案」「善榮書状案」



俳句に託された思い

— 沼尻墨僊と地球儀 —

掛軸に俳句二句が書かれています。

日や月や つまはちくまに 九々の春
若菜つむ 中に九々たつ 翁かな

乙卯のとし 八十一齡の春を迎ふ 墨僊老人 ※「乙卯」は安政2（1855）年

右の句の「つまはちく」は爪弾き、つまり、爪先を親指の腹にかけてはじくことで、気に入くわないときや忌み嫌うときにするしぐさです。このしぐさはそろばんをはじくときの手の動きとも似ています。「爪弾きなどをしているうちに81歳の春を迎えてしまったよ」。左の句は「若菜を摘んでいたと思ったら盛りがすぎてもう81歳だ」と、右の句の「九九」に自分の年齢の「八十一」をかけ、左の句の「九々たつ」に薑がのび、固くて食べられない状態をいう「莖立」の意味をもたせた技巧的な句です。

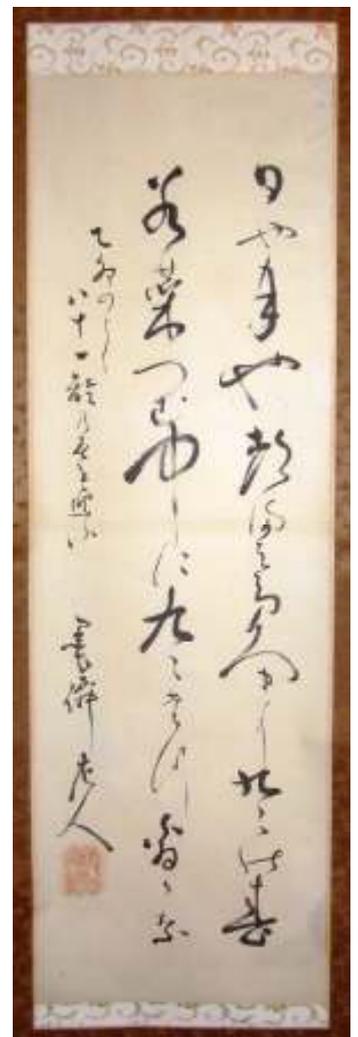
作者の沼尻墨僊（1775～1856）は、城下町土浦で生まれ育ち、私塾「天章堂」を営んで多くの門人を育てました。安政3年、82歳で亡くなっていますので、亡くなる1年前の書ということになりますが、衰えを感じさせない、流れるような筆さばきです。

墨僊には天体と地球の関係論を論じた著作「地球万国図説」があり、安政2年には「大輿地球儀」という名の地球儀を版行（印刷）しました。これは、傘のように開いたり閉じたりすることができるので、「傘式地球儀」というニックネームで知られています。筒状の紙から球形が生まれ、しかも地球儀になるのですから、当時の人々にとっては絡繰仕掛のように思えたことでしょう。開閉式の地球儀は持ち運ぶにも、しまっておくにも便利でした。

地球儀の世界図を印刷するための版木が伝わっています。世界図用が4枚、趣意書と説明書用の小型のものが2枚あり、この版木によって地球儀は大量に生産され、京都や大坂、江戸にむけて出荷されました。アメリカやイギリスの船が来港し、外国への意識が高まっていた時代です。

水戸藩主徳川斉昭（1800～1860）が「大輿地球儀」を見て感動したという手紙が伝わっています。手紙には、紀州徳川家でもこの地球儀を見たと書かれており、大名の間でも評判だったようです。

墨僊の名を知らしめた地球儀の制作も、冒頭の俳句が書かれたのも同じ安政2年のことでした。そう思ってこの句を読みなおすと、太陽や月など天体の動きを調べて計算し地球儀作りに腐心していた年月をも含め、自分が生きてきた時間の長さにしみじみと思いを込めているのだといえましょう。（木塚久仁子）



墨僊書 俳句（当館所蔵）

11/26（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 大輿地球儀（市指定文化財）（近世コーナー「城下町の文化」に展示）
- 徳川斉昭書状（近世コーナー「城下町の文化」に展示）



土浦城櫓門の太鼓

—人々の心に刻まれた太鼓の音—

前ページでご紹介した沼尻墨僊は、弘化2(1845)年に伊勢参りへでかけています。71歳という老齢の身でありながら、伊勢参宮の後、奈良や高野山、さらに四国の金毘羅宮まで足をのばし、山陽道を経て大坂・京都にも立ち寄っています。その旅の途中、尼崎(兵庫県尼崎市)で朝四ツ時(午前10時)を知らせるお城の太鼓を耳にした墨僊は、その日の日記に「我故園を思ひ出」したと書きとめています。土浦を出発して2ヶ月あまり、遠く離れた場所で耳にした太鼓の音に、故郷をなつかしく思いおこした墨僊の姿がありました。

ご存知のとおり、土浦城の本丸入口に位置する櫓門は、土浦市を代表する文化財です(茨城県指定史跡)。2階部分に太鼓が置かれ、城下に時を知らせたことから「太鼓櫓」とも呼ばれています。そして、この櫓門におかれていた太鼓(土浦市指定文化財)も現存しています。江戸時代の太鼓櫓と太鼓がともに現存している事例は全国的にみても稀少で、土浦の誇るべき文化財といえます。しかし、太鼓は漆の剥落や革の弛みなどがみられ、必ずしも良好な状態にはありませんでした。そこで太鼓の所有者である土浦八坂神社は、昨年8月から10月にかけて大がかりな修復を行いました。太鼓は浅草(東京都台東区)の専門修復業者に持ち込まれ、漆の塗り替えや革の張り直し作業が進められましたが、その工程でいくつかの新しい発見がありました。

もっとも大きな発見は胴内部で確認された複数の年号と名前です。明和7(1770)年の「武州江戸浅草新町御太鼓師 石垣孫市」は製作者を示すと考えられ、今から約240年前に江戸の職人によって作られたものと分かりました。また、江戸時代に行われた8回分の修理も記録されていました。これらの修理は、土浦城下で行われたものと推測され、明治時代を迎えるまでのおよそ100年間、修理を繰り返しながら太鼓が使われていたことを明らかにしてくれました。

明治12(1879)年、太鼓は旧藩士ら土浦町の人々によって、土浦八坂神社に神前太鼓として奉納されました。神社に伝わる奉納額には、160名にも及ぶ町の人々の名前が記されています。廃城により城の建物のいくつかは取り壊され、土塁の掘削や堀の埋め立てが進み、土浦城は往時の姿を失っていました。町の人々は、か

つて城下に鳴り響いていた太鼓に対して格別の思い入れがあったのではないのでしょうか。だからこそ、土浦城の鎮守であった八坂神社への奉納というかたちで、太鼓が残されたと推察されます。

櫓門の太鼓の音は、土浦城下の人々の心に深く刻まれたものだったと思います。

(萩谷良太)



写真左：太鼓胴内部の墨書、 写真右：修復された太鼓(土浦八坂神社所蔵)

12/24(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
●土浦城模型(近世コーナーに展示)
●沼尻墨僊関係資料「西杖日記」他
(近世コーナー「城下町の文化」に展示)



ツェッペリン伯号飛来の新聞記事

— 霞ヶ浦が広く知られた日 —

昭和4（1929）年8月20日の東京日日新聞（現毎日新聞）には「ツェッペリン伯号 きのふ輝く帝都訪問 世界航空史上の驚異」「無事霞ヶ浦に着陸」などという見出しが堂々と一面を飾っています。ツェッペリン伯号（LZ127）とは、ドイツのツェッペリン社が開発した巨大飛行船です。航空機が進歩しつつあった時代でしたが、それでもまだ大空の主演は水素を用いた飛行船である中、ツェッペリン伯号は世界一周を計画し、その着陸地のひとつとして霞ヶ浦飛行場が選ばれました。

霞ヶ浦飛行場は霞ヶ浦海軍航空隊の飛行場です。現在の阿見町と土浦市の境界付近には、当時海軍の基地が点在していました。なぜ霞ヶ浦飛行場に立ち寄ったのでしょうか。それは、霞ヶ浦飛行場には巨大な格納庫があったからです。第一次世界大戦の戦利品としてドイツから日本に運ばれたもので、押取格納庫^{おうちゅう}と呼ばれ、全長236.6メートルのツェッペリン伯号の整備や点検に最適なものでした。

ツェッペリン伯号はどんな飛行をしたのでしょうか。まずアメリカのレイクハーストを8月8日に出発し、ドイツのフリードリッヒスハーフェンで燃料を補給、シベリアを越え日本の霞ヶ浦に達し、その後太平洋を横断して8月29日にはレイクハーストへ帰還する、総飛行距離32,790キロメートル、総飛行時間288時間11分という壮大なものでした。

記事によればツェッペリン伯号は8月19日午前1時頃日本上空に姿を現しました。佐渡ヶ島経由のコースを予定していましたが、激しい降雨と霧のため、日本の東海岸を南下するルートに変更されました。北海道の上空から、午前9時には青森・岩手・宮城・福島・茨城上空を移動し、土浦・霞ヶ浦を過ぎ、いったん東京・横浜まで飛び、再び午後6時に霞ヶ浦へ戻るというものでした。東京では「銀色の空の国寶^{こくひん}」を一目見ようとビルの窓や屋上に「蟻の這い出る隙間もない位の人出^{ありはすま}」があったと伝えています。土浦にも臨時列車が出て、30万人もの見物客が訪れました。飛行場に徒歩で集まる住民も多かったようです。ツェッペリン伯号は8月23日には霞ヶ浦飛行場を飛び立ちました。

多くの人々が心待ちにし、熱狂した一大イベントは、霞ヶ浦の名を広く知らせるきっかけにもなりました。その後霞ヶ浦飛行場には外国機が次々と訪れるようになり、「東洋一の飛行場」と呼ばれました。



（野田礼子）

東京日日新聞記事（個人所蔵）

10/22（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- ツェッペリン伯号飛来写真
- 音楽会入場券
- 航空隊関係写真絵葉書



つちうらきょう ど どくほん

『土浦郷土読本』

—土浦小学校がまとめた郷土土浦—

『土浦郷土読本』は、昭和15（1940）年に土浦尋常高等小学校（現土浦小学校）が高学年児童用に編集発行したものです。第1課「土浦の今昔」から第28課「伸び行く土浦」までの構成で、「桜川堤の桜」「亀城公園」などの見所、「色川三中和三郎兵衛」「佐久良東雄」などゆかりのある人物、「公魚とり」「製糸工場」などの産業・歴史にかかわる事項を、時局を意識しながら取り上げています。

大正時代から昭和時代初期にかけて全国的に郷土が再認識され、郷土に関する読本が各地で作成されました。『土浦郷土読本』もそのひとつと言えますが、この本の成立には特筆すべき大きな困難がありました。それは昭和13年の大水害です。

序文の中で田澤次郎茨城県師範学校長は「昭和12年からの長い研究に、13年の大洪水の災厄に遭ふとも、倦まず屈せずやり通した同校職員の不拔の精進に感嘆するわけであるが、同時に職員を激励して之を仕遂げさせた大場校長の識見に敬意を表する次第であります」と記しています。昭和12年といえば日中戦争の始まった年であり、土浦町と中家村が合併した年でもありました。そのような時期に編さん作業が始まり、13年には水害に遭遇したことがわかります。

また、はしがきには、「本書の編纂中未曾有の大水害に襲はれ、原稿、紙型、写真原版及び用紙等一切を流失し、再編纂にあたり非常なる困難に遭ひました」とあり、水害の影響によって編さん作業を一からやり直したことがわかります。さらに最後の第28課では、観光都市としての土浦の発展、都市計画、町村合併などについて述べたあと、水害は大きな痛手ではあったものの、町民が一致団結するきっかけとなったことが述べられています。これらの記述から、

昭和13年の水害が本書の成立自体にも影響を及ぼしたようすが窺われます。単なる過去の一災害では片付けられない出来事は、第25課の「噫！大水害」として掲載されました。

本書が発行された昭和15年は皇紀2600年の年であり、小学校が国民学校に変わる前年でした。11月には土浦町と真鍋町が対等合併して土浦市となった年でもあります。本書は時宜にかなったものであり、水害克服の記事は本書の存在価値を高めることになりました。（野田礼子）



土浦郷土読本（当館所蔵）

11/5（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

- 下記の資料もあわせてご覧ください。
- 皇紀2600年記念写真帳（近代コーナーに展示）
 - 水難克服のチラシ（近代コーナーに展示）
 - 川と洪水の思い出（近代コーナーメッセージ展示映像）



市史編さんだより

～～～さよなら土浦幼稚園大手町園舎～～～

土浦市立土浦幼稚園は、平成 24 年 3 月末、いくぶん幼稚園との統廃合により、大手町の園舎がその役割を終えることになりました。私は娘が在園していた平成 17 年に創立百二十周年記念式典に携わる機会に恵まれ、土浦幼稚園に保存されていた往時の教育玩具等の、貴重な資料を目にすることができました。また、創立百周年記念事業に尽力された先輩方の話をうかがい、どれほど地域の方々に守られて存続してきたかを知りました。

土浦幼稚園は明治 18 (1885) 年に土浦西小学校 (現土浦市立土浦小学校) 附属幼稚園として設立された、茨城県初の幼稚園です。当時重要視されたフレーベルの幼児教育法を取り入れ、彼が考案した玩具「恩物」をいち早く入手し、それらは有効に活用され、今も大切に保存されています。平成 23 年 9 月 1 日発行の「広報つちうら」には幼稚園に伝わった鐘の記事が載っていますので併せてご覧下さい。

市史編さん事業で調査した明治 40 年 12 月 17 日のいはらき新聞の記事には、県内で幼稚園は 5 園のみと記されています。「幼稚園は水戸市に公立二個私立一個太田町に公立一個土浦町に公立一個計五個にして設備は概ね備われり… (中略) …幼児数五百十三人男二百六十八人女二百四十五人… (後略)」

また、昭和 17 年の紙面には、志願者 300 名に対し 205 名が入園を許可され、当時は定員を越える希望者に対して抽選で入園者が決められていたという記事もあります。

『土浦幼稚園創立百周年記念誌』にも、終戦後の昭和 23 年に入園希望者が激増したとあります。市では最初入園者をくじで決めた後に、二部制に変更して志望者全員を入園させることにし、11 学級 489 名の子ども達が午前の組と午後の組とに分かれて登園する二部保育が行われました。昭和 24 年 1 月に第二幼稚園が富士崎町にでき、二部保育は解消。その後も入園希望者の増加に伴い、38 年に公園分教場が、48 年に大町分教場が開設され、49 年のいくぶん幼稚園開園まで利用されました。現在の園児数は約 30 名、かつて園児の多い時代があった事が夢のようで、時の流れを感じます。

我が家では明治生まれの曾祖父から平成生まれの娘達まで、親子 4 代にわたり土浦幼稚園にお世話になりました。このように親子 3 代、4 代にわたって土浦幼稚園に子どもを通わせた家庭にとっては愛着ひとしおで、誇りさえ感じます。

園舎がなくなる前に何かできることはないかと考えた後援会有志の声かけにより、8 月の 5 日間ではありましたが園舎を開放して、幼稚園の懐かしいパネル等を展示し、地域の方々に見ていただく機会を設けました。卒園生を始め元職員や保護者等 200 人程の方が来てくださり、当時の思い出話をしたり、修了生の写真に見入る姿が見られました。大正 13 年から昭和 55 年まで使われていた旧園舎のパネルを懐かしくご覧になった方が多く、この旧園舎は、感覚訓練の教材で知られるモンテッソーリが提唱した「子どもの家」を模範としていました。94 歳になられる方からは、その園舎よりさらに前の園舎のお話をうかがいました。また、大事に保管された卒園アルバムをお持ちの 88 歳の方からも思い出話をうかがい、改めて多くの方々の土浦幼稚園への思いを実感することができました。この地で新旧の園舎は、どんなにたくさん子ども達を、そして土浦の歴史を見つめてきたことでしょう。

園舎がなくなってしまうのは寂しく残念なことですが、4 月からは文京町のいくぶん幼稚園が新しい土浦幼稚園としてスタートします。これからも歴史を重ね、土浦の幼児教育を担っていくことを願っています。

(市史編さん係 非常勤職員 海老原麻里子)

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

博物館では今年も恒例の夏休みファミリーミュージアムを開催しました。体験講座には多数の申し込みをいただきました。今回は参加者のみなさんの感想と作品をご紹介します。

「親子はたおり教室」参加者の声

○はたおりがどういうものか、初めて分かりました。最初は少し難しかったのですが、慣れてからははまってしまうました。来年もやるのなら、また来たいです。(小学4年生)

○昨年体験させていただいて以来、すっかり親子ではまっています。今日は家族の古着を裂いた布を使って織らせていただき、作品そのものもよい記念となりそうです。親切に教えていただきありがとうございました。(母親)

「日本刀を持ってみよう」参加者の声

○すごく緊張しました。日本刀を持ててよかったです。(小学3年生)

○時代劇ブームなので、子供よりも興味がありました。今までにない雰囲気を感じることができました。(母親)

「ミニ掛軸をつくろう」参加者の声

○掛軸作りで「天・地・柱」が自由に選べて、オリジナルの作品ができてよかったです。(小学4年生)

○先生方が本当に丁寧に教えて下さったので、素晴らしい作品が完成しました。一点一点の作品をかけがえない物として扱っていただいていることが伝わってきて、そういう気持ちの大切さも教えていただきました。ありがとうございました。(母親)



「親子はたおり教室」



「日本刀を持ってみよう」体験



「ミニ掛軸をつくろう」完成作品

コラム(17) - 山ノ荘地区 民俗調査はじまる -

本年度から新治地区の民俗調査が始まりました。平成 23~24 年度は山ノ荘小学校区の「日枝神社流鏝馬祭」(県指定文化財)が対象です。あわせて区内の祭礼・年中行事・人生儀礼などの記録を行うもので、筑波大学民俗学研究室の協力のもと進められています。

調査は7月下旬から本格化しました。山ノ荘の4つの大字で行われている祇園祭では、子供たちが天王様の神輿を担いで集落を廻ります。玄関先で家人をお祓いし、御札を配って歩きます。大杉様の神輿を担ぐ集落もありました。「悪い病が入らぬよう、大杉様が参りました」、そう言って神輿を揉み、疫病を払います。大杉様とは、稲敷市阿波の大杉神社のこと。疫病や水運の神として信仰されています(アンバ大杉信仰)。その他、万燈や土俵祭りなど、山ノ荘では集落ごとに特徴的な民俗行事がみられるようです。山ノ荘に続いて藤沢・斗利出小学校区についても順次調査を進めてまいります。歴史ある新治地区の多様な民俗文化を記録にとどめていければと思います。地域の皆様方のご協力なしには実現できません。どうぞよろしく願いいたします。(菰谷良太)

情報ライブラリー更新状況

【2011・10・1現在の登録数】

古写真 477点(+5)

絵葉書 384点(+5)

※()内は2011年7月1日時点との比較です。

展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2011年度 秋季展示室だより(通巻第17号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2011年度冬季展示は、2012年2月25日(土)~3月25日(日)となります。「霞」2011年度冬季展示室だより(通巻第18号)は2月25日(土)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。